

[国 語]

伝記を国語授業で読むことの探究

- 小学5年『レイチェル＝カーソン』の比べ読み学習の考察から -

小川 高広*

1 問題の所在

「伝記」は、現行学習指導要領の第5、6学年「読むこと」の言語活動例に明記されており、次期学習指導要領においても〔思考力、判断力、表現力等〕の「読むこと」の言語活動例に「伝記を読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動」と盛り込まれた。伝記という文種は、形式面では「事実」と「筆者の解釈」によって表現されている文章であり、内容面では被伝者の生涯が語られている。殊に、内容面と読者との関わりが強いことが伝記の特徴と言える。アンドレ・モロワ（1930：103）が「伝記は、文学のどのジャンルよりも道徳にかかわりをもつ。（中略）なぜなら、話が信用でき、読者はその中の人物が実在者であると確信するから、伝記の影響がいっそう大きくなるのである」と述べるように、伝記を読むことによって読者には「強い感情」や「行動しようとする欲求」が生まれるのである。このような特徴によって「伝記を読み、自分の生き方を考える」ことができると言える。

小川（2016）においては、伝記の特徴を鑑み、形式と内容を統合した読みの学習を提案している。そこにおいては、同一の被伝者の伝記の比べ読みを通して文章を相対化し、筆者を認識させたり伝記の表現形式に気付かせたりしている。一方、言語の学習として「言葉への着目」が十分ではなかったことを課題に挙げる。伝記を国語授業で読むこととは、言葉を深く読むことであると考え。本研究においては、そのような国語授業について探究していく。

伝記はその言葉に着目すると、「被伝者が生きた時代の言葉」と「筆者の言葉」によって織りなされたテキストであると言える。被伝者の発した言葉やその時代に発せられた言葉は、当時の社会状況を捉えて初めて深い理解と解釈が可能になる。このような被伝者が生きた時代に発せられた歴史的な言葉を「被伝者の言葉」と呼ぶこととする。対する「筆者の言葉」は、被伝者の言動や業績を価値づける役割を担う。また、モロワ（1930：38）は、「伝記作家は、肖像画家や風景画家のように、自分の見ている全体のなかから肝心なものを取りださなければならない」とし、「題材の選択がおそらく伝記作家にとってなによりも重要なのである」と述べる。筆者の意図に応じて、事実が選択され表現されることも「筆者の言葉」と言える。このように考えると、伝記の言葉を深く読むこととは、「被伝者の言葉」を理解、解釈する過程と、「筆者の言葉」を相対化し批評する過程が考えられる。そして、これらの過程を経て自身の生き方を考えたり、伝記の言葉を再評価したりする過程、つまり伝記の言葉と読者との相互作用の過程に至ると考える。これが創造の過程である。これら一連の過程を国語授業において伝記を深く読むことと定義したい（図1）。しかし、管見の限りにおいては、伝記を「道徳」で読むことと相違ない国語授業が散見される。伝記の言葉を深く読む国語授業について明らかにしたい。

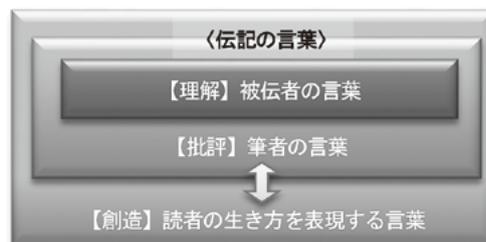


図1 国語授業で伝記を深く読む学習過程

2 研究の目的と方法

本研究は、国語授業で伝記を深く読むこととして、伝記の言葉を検討し、自分の生き方を考える伝記学習を提案することが目的である。

研究の方法は、まず、伝記を深く読むために「被伝者」「筆者」「読者」の3つの言葉を検討する学習を構想する。次に授業実践を行い、学習の様相を分析、考察することを通して、学習活動の有効性を検証する。なお、本研究における主教材は上遠恵子著「レイチェル＝カーソン」（平成28年度版『みんなと学ぶ小学校国語5年下』学校図書。以下、上遠本）、学習者は小学5年生とする。

* 上越市立高志小学校

3 伝記の言葉を深く読む学習活動の構想

(1) 「被伝者の言葉」を理解する過程

伝記を教材とした学習指導について輿水（1981：182）は、「背景となっている歴史や社会に対する知識・理解など不十分なままで、無条件に受け入れさせることは、かえって、危険である」と指摘する。被伝者の言動や業績をその時代や社会と結びつけて読み取ることが必要である。そのために、単元の導入において、難語句や背景となっている社会状況についての疑問を解決する場をつくる。また、被伝者の生きた時代と現代とを比較することによって、生活や社会状況、価値観の相違などを考えさせ、「被伝者の言葉」の理解を図る。

(2) 「筆者の言葉」を批評する過程

① 筆者が選択した言葉の特徴

学習者にとって伝記の筆者を意識することはおそらくないであろう。それは、被伝者への興味・関心が第一にあるためである。しかし、国語授業においては、筆者の意図に応じて選択された言葉によって被伝者が描かれていることを捉えることが求められる。他方、伝記の特徴ゆえ「ゆがんだ主人公が生まれる」（モロワ1930：48）ことも危惧される。例えば、「注目すべき事件が英雄の生涯の恐らく数時間しか占めておらず、そのほかは、われわれの生活と大差ない」（モロワ1930：119）という場合においても、筆者はもっぱら目立つ点を浮き彫りにするからである。このような文章は読者を惹きつける一方で、それを鵜呑みにしては受動的な読みと言わざるを得ない。

では、このような課題を克服するためにはどのような学習活動が考えられるであろうか。国語の学習指導の方法に、テキストを批判的に読むクリティカル・リーディングや批判的読みの理論と実践がある。これらは、テキストの形式と内容を批判的に検討し、テキストの背後にある筆者の意図を推論したり評価したりすることに目標が置かれている。これらの理論と実践を援用し、言葉を分析し筆者の意図を推論する伝記学習を構想する。

② テキストを相対化する学習活動

次に、具体的な学習活動を検討していく。一つのテキストを参照するだけでは筆者の描く「ゆがんだ」被伝者像を享受する可能性が高い。そこで、テキストを相対化するために、同一の被伝者の伝記を複数読み比べる。比べ読みによって、同一の被伝者を扱った伝記であっても形式と内容に相違があり、描き出される人物像に違いが生まれることに気付くことができる。このような学習活動によって、筆者が認識され、筆者の意図に応じて形式と内容が選択されていることが理解できると考える。

比べ読みに使用するテキストは、上遠本の他に、小手鞠るい著『科学者レイチェル・カーソン』（以下、小手鞠本）とマーティー・ジェザー著、山口和代訳『運命の海に出会ってレイチェル・カーソン』（以下、マーティー本）を用いる。選書の理由は、文章表現が平易で、エピソードが詳細に記述されている点である。ただし、3種の伝記の全てを読み比べることは現実的でない。上岡（2013：3）は、レイチェルの生涯を題材とした大学の授業において「事実を全て紹介するのが教授する最適の方法であろうか」と自ら問い、「彼女の生涯の中でも特徴的なエピソードを選び、それを中心に進めてゆく方が受講生、少なくともカーソン初習学生にとっては効果的ではないだろうか」と、レイチェルの生涯のターニングポイントを取り上げ教授している。そこで本研究においても、レイチェルの生涯で特徴的な場面を取り上げ比べ読みさせるという学習活動の焦点化を図る。取り上げるエピソードは、1. レイチェルの子ども時代における母との関わり、2. 科学者と作家の選択、3. 『沈黙の春』の執筆、4. 『沈黙の春』発表後、とする。

③ 筆者の言葉を批評する

筆者の言葉を批評するために、「書評」という表現活動を行う。書評は、テキストの形式と内容を分析し、筆者の意図を推論したうえで読み手の評価を表現するものである。具体的な学習活動としては、学習者に3種の伝記から1冊を「おすすめの本」として紹介することとする。学習者の主体的な読みを表現する場としたい。

(3) 伝記の言葉を受け止め、読者が考えを創造する過程

単元終末に被伝者の生き方と自身の生き方を関わらせて自分の考えをもたせる。本単元では、伝記を読む目的を「生き方を学ぶため」と設定し、単元の導入に、学習者に自身の生活場面の「がんばっていること」や「悩みや不安」を挙げさせる。学習者は、伝記の読みを通して被伝者の生き方と自分の生活とを関わらせながら自分の考えをもつようになると思える。

では、学習者は被伝者への関心をもちつづけて伝記を読み進めることができるであろうか。上遠本の課題として指摘できるのは、レイチェルの生涯が足早に紹介され展開が速く、内容理解が難しいことである。そこで、学習者の疑問や分からなさに寄り添い、それを解決する学習過程をとることによって、追究する意欲をもちながら読み進められるようにする。このような過程は、伝記に表現されなかった事実を知ることにもなり、被伝者の成功、成就の面だけでない不

安や葛藤、挫折への着眼ともなろう。茅野（2012：290）は、「メディア社会に生きる現代の子供たちは、「単なるスーパーマンの物語」=立身出世譚に懐疑的な目を向け、そのような被伝者に「共鳴の情を抱かないのではないかと述べる。そして、「妥協、逃避など弱さも含めた様々な感情を抱く人間像を提示し、また多様な価値観を体現した人物たちを採録することが今、求められる」と提案する。本單元においても、疑問を解決する過程をとることによって、被伝者への関心を高めるとともに、「弱さ」を含めた被伝者の多面的な理解を目指す。このような学習活動によって、思春期を生きる学習者が被伝者に「共鳴の情」を抱き、自分自身との対話を始め、新たな「生き方」を創造すると考える。

4 授業の概要

- (1) 単元名 レイチェル先生が教えてくれたこと
- (2) 単元の目標
 - ・伝記が筆者の意図に応じて書かれていることを捉え、文章について自分の考えをもつ。
 - ・被伝者の生き方、考え方と自分の生き方を結びつけて、自分の考えをもつ。
- (3) 学習者 新潟県公立小学校5年A組26名
- (4) 実施期間 平成28年10月～11月
- (5) 学習計画 右表参照。

次時	○主な学習活動
一 1	○日常生活を振り返り、悩みや改善したい点、がんばっていることなどを考える。 ○授業の振り返りを書く。(毎時間)
2	○教材文を読んですごいと思ったところ、よく分からなかったところを出し合い、学習課題を設定する。
二 3	○補助資料を使って、疑問を解決する。
4	○レイチェルがしたことを年表に整理する。 ○被伝者が生きた時代と現代を比べる。
5	○3つの伝記の「1. レイチェルの子ども時代と母との関わり」を読み比べ、伝記の特徴を考える。
6	○3つの伝記の「2. 科学者と作家の選択, 3. 『沈黙の春』の執筆, 4. 『沈黙の春』発表後」を読み、内容のだいたいをつかむ。
7	○1つの場面を選び、3つの伝記を読み比べ筆者の意図を考える。
8	
9	○「おすすめの本」として書評を書く。
三 10	○自分の生活を振り返って「レイチェル先生が教えてくれたこと」を書き、交流する。
11	

5 分析の方法

伝記の言葉を深く読む学習について明らかにするため、図1の3層の言葉を理解したり検討したりできたかを分析する。分析の対象とするのは、「ア. 被伝者の言葉」を検討する第1時～第4時の様相、「イ. 筆者の言葉」を検討する第5時～第9時の様相、「ウ. 伝記の言葉を受け止め、読者が生き方を表現する言葉」を検討する第1時、第10時、第11時の様相である。分析の資料とするのは、ICレコーダーに録音した発話をトランスクリプトしたプロコルデータと学習者の記述である。

6 学習分析

(1) 被伝者の言葉を理解する学習の分析（第1～4時）

① 学習の様相

上遠本の範読を聞いた学習者が初発の感想で「すごいと思ったところ」と「よく分からなかったところ」を出し合った(表1)。「言葉」では、学習者には耳慣れない「公務員」や「漁業局」といったアメリカ合衆国の機関が挙がった。学習者は補助資料を読み、当時のアメリカにおいて女性が研究機関に勤めることが稀であったことを知り、レイチェルの研究心を捉えることができた。「農業使用」では、現代では考えられないことが当時当たり前に行われていたことを知り驚くとともに、それについて真っ先に警笛を鳴らしたのがレイチェルであったことを知った。「レイチェルの生涯」については家族のことが多く挙がった。レイチェルの母マリアがレイチェルに大きな影響を与えたことはその記述量からも読み取れる。一方、父ロバートは伝記にほとんど登場することはなく、学習者はそこに疑問を感じた。これは、伝記には表現できないレイチェルの「弱さ」の部分であるとも言える。学習者は授業者の提示したロバートの資料を読み、レイチェルの家庭環境とロバートがレイチェルに与えた影響について知り、被伝者を多面的に理解することができた。

また、レイチェルが生きた時代と現代との違いを考えた場面では、次のような考えが出された(表2)。記述を見ると、自然、農業、医療、戦争、通信、女性などの観点で比較していることが分かる。学習者は上遠本では十分に表現されていないレイチェルの家族のこと、当時の社会状況や価値観のことを知り、レイチェルの言動や業績の意味を理解す

表1 初発の感想(抜粋)

観点	よく分からなかったところ
言葉	・漁業局、公務員、DDT、殺虫剤、センスオブワンダーの意味。
表現	・「海は力強さに・・・。」 ・「私たちの頭の上を・・・。」 ・「科学の目と文学の心が一つ」とは。 ・なぜ『沈黙の春』なのか。
農業使用について	・あと先も考えずになぜ殺虫剤をまいたのか。 ・農業をまいてうれしいことは何か。 ・化学薬品会社は(生き物が)死んでいることに気付かなかったのか。 ・薬品会社はなぜ悪くないと言いつけるのか。 ・どんな法律ができたのか。
レイチェルの生涯について	・レイチェルにはお父さんはいるのか。 ・なぜ生物学者を選んだのか。 ・作家の道はあきらめたのか。 ・家族のことがあまり書かれていない。 ・兄や姉、養子ロジャーについて。

ることができたとと言える。

② 考察

「被伝者の言葉」を理解するために、伝記の読みから生まれた疑問を解決する過程をつくった。レイチェルの家庭環境や当時の社会状況などを知ることによって、被伝者が現代との異なる社会状況や価値観の中で強く生き、目標や目的を達成したことを一層理解することができたと言える。学習者の疑問を出発点に被伝者の生きた時代の歴史的な言葉の理解を図る過程をとったことは有効であったと考える。

(2) 筆者の言葉を批評する学習の分析 (第5～9時)

① 学習の様相

3種の伝記の「子ども時代(母との関わり)」のエピソードを読み比べ、伝記の共通点と相違点を出し合い、伝記の特徴を次のように整理した(表3)。学習者は、伝記によって取り上げる事例や表現形式が異なることに気付き、筆者を認識した。また、筆者によって文章が異なることから、「いろいろな」被伝者の姿を「知れる」としている。さらに学習者の中には、筆者の意図についてキーワードでまとめる者もあった(表3波線部)。この気付きを生かし「いろいろなレイチェルを知ろう」と続く3つの場面についての比べ読みを促した(表4)。

次に、「4.『沈黙の春』発表後」の場面(表5)を比べ読みした4班の交流の様相を取り上げ、筆者の意図を考える学習について分析する。筆者の意図を検討するために用いたワークシート(図2)は、Y字に区切った部分に各伝記を読んで気付いたことを、中心部分には筆者の意図を記入する形式であった。記述の内容は表6の通りである。

上遠本については、①「ストーリーのよう」と文学的文章のように読み味わえることを感じていたり、「子どもでも～分かる」と、小学生を意識した簡潔な表現で被伝者の生涯が語られていることに気付いたりしている。小手鞠本では、Yuが「批判」の声を引用し、④「表現が上手」と評価している。対して「DDT」など事実の記述が少ないことを指摘している。このような気付きから学習者は、⑦「レイチェルは本を反対されても、無理なことがあってもあきらめていない」と筆者の意図を推論した。これは、被伝者への数々の批判を理解するとともに、それを乗り越えた被伝者の生き方が伝わる文章だと評価したものである。最後に、マーティー本については、「言葉の難しさ」が「信用」につながったことや、「DDT」の詳しさを特徴に挙げている。

これは、上遠本、小手鞠本との大きな相違点であり、説明的な文章表現が特徴であると捉えている様相と言える。一方、筆者の意図については、「『沈黙の春』執筆後」とは異なる場面からの指摘であった(表6⑩)。複数場面、複数資料を

表2 被伝者が生きた時代と現代との違い

観点	学習者の記述
自然	・今は都会などがあるけど自然がなくなったりしているけど、昔は何もなく野原で、川などにたくさん魚がいたこと。
環境	・今はDDTなどの強力な殺虫剤が少ない。DDTを頭につけない。 ・昔は農薬をいっぱい使う。今は環境に害がない薬品を使い、量も制限されている。
技術	・昔は、病気になっているのに入院、治療していない。今は医療が発達している。 ・昔は手紙だったが、今は電話、メール。
その他	・今は戦争が少ないけど、昔は多い。 ・昔は、女性があまり働いていなかったけど、今は女性もたくさん働いている。

表3 3種の伝記を比べ読みした学習者の気付き

共通点	・分かりやすい表現。 ・レイチェルと母の関わりが書かれている。 ・生き物が登場する。
違い	【上遠本】問いかけがある。レイチェルの根気強さが伝わる。 【マーティー本】難しい表現。母マリアのことばかりが書かれている。 ・事例が違う(ヘビ、ヒナドリ) ・ <u>上遠さんは「生き物の素晴らしさ」を、小手鞠さんは「レイチェルのやさしさ」を、マーティーさんは「命の大切さ」を伝えたい。</u>
考えたこと	・筆者が変わると文章が違う。→レイチェルの姿が変わる。 ・いろいろなレイチェルが知れる。 ・筆者の伝えたいことが違う。
特徴	・筆者によって選択する事例が違う。 ・表現の仕方が変わる。 →伝えたいことが違うから。

表4 選択した場面と選択した人数

場面	人数
2. 科学者と作家の選択	5人
3. 『沈黙の春』の執筆	7人
4. 『沈黙の春』発表後	14人

表5 3種の伝記における「『沈黙の春』執筆後」の比べ読み資料(抜粋。／は改行)

上遠本	小手鞠本	マーティー本
賛成・反対の論争がアメリカ中に起こり、レイチェルにも、さまざまなかうげきやいやがらせが行われました。けれども、その何十倍もの人々がレイチェルの意見に耳をかたむけ、心から支持してくれました。(中略)／やがて提出された報告書は、レイチェルの主張が正しいことを証明していました。(中略)／いくつもの賞がレイチェルに送られましたが、もうあるけなくなくなっていました。／一九六四年四月十四日、自分の作品が人々の中に生き続けることを信じて、レイチェル・カーソンは静かに世を去りました。	賛成・反対の論争がアメリカ中に起こり、レイチェルにも、さまざまなかうげきやいやがらせが行われました。けれども、その何十倍もの人々がレイチェルの意見に耳をかたむけ、心から支持してくれました。(中略)／やがて提出された報告書は、レイチェルの主張が正しいことを証明していました。(中略)／いくつもの賞がレイチェルに送られましたが、もうあるけなくなくなっていました。／一九六四年四月十四日、自分の作品が人々の中に生き続けることを信じて、レイチェル・カーソンは静かに世を去りました。	賞賛の手紙や電報が雑誌に殺到しました。普通の市民はもとより著名な科学者たちが寄せた賞賛と懸念は、ホワイトハウスにまで届きました。(中略)／(中略)カーソンを中傷する人たちは、支持者たちよりもはるかに声高でした。(中略)／化学会社は、出版社に五ペーシにもおよぶ手紙を送りつけて、「沈黙の春」を単行本にして出版する計画を中止せよ」としました。(中略)本がベストセラーのリストのトップにのぼると、農薬の擁護者たちによる反撃はエスカレートしました。／このようにいろいろと曲解されたにもかかわらず、『沈黙の春』がうったえたメッセージは、多くの人々に聞き届けられました。

総合して筆者の意図を推論したものと考えられるが、学習活動の焦点化の観点においては課題が認められた。

最後に、「筆者の言葉」を批評する「書評」を書く活動を二人の学習者の記述を取り上げ分析する(表7)。マーティー本を「おすすめ」したAkは、マーティー本が、「母マリアのこと」や「DDTや薬品会社がやったこと」が詳細に書かれていることを捉え、「お母さんを大切にしていたことが分かる」、「細かく書いてあるのでよく分かる」としている。Akは、表6⑧、⑩のようにマーティー本の形式や内容について捉えたことを書評に書いたと認められる。次に、Yuは書評に小手鞠本を取り



図2 筆者の意図を検討したワークシート

表6 3つの伝記を比べて気付いたことと考えた筆者の意図(4班。ワークシートから抜粋。○番号は筆者による)

伝記	上遠本	小手鞠本	マーティー本
3つの伝記を比べて気付いたこと(学習者)	①ストーリーのよう。(Aw) ②子どもでもレイチェルのDDTにうったえたことが分かる。(不明) ③薬品会社の言い分とレイチェルの説のどちらが正しいかのことを詳しく書いている。(不明)	④「さわがしい春」や「地球は害虫だらけ」、「カーソンの本は農業より有害」などと読者を楽しませている、「嵐に包まれました」と表現が上手。(Yu) ⑤レイチェルが『沈黙の春』の本を出して、どのようなことをされたかをくわしく書いている。(Aw) ⑥レイチェルが調べたDDTの事をあまり書いていない。(不明)	⑧難しい言葉を使っているけど、細かく書いていて信用しやすい文章。(Ak) ⑨「ホワイトハウスまで届いた」などを書いている。(Ts) ⑩レイチェルの調べたDDTや薬品会社のやったことなど、詳しく書いてある。(Ak)
班で考えた「筆者の意図」	(時間がなくなり記述なし)	⑦レイチェルは本を反対されても、無理なことがあってもあきらめていないということを伝えたい。	⑪レイチェルには母がいなくてはならない存在だったことを伝えたい。

表7 学習者が書いた書評(4班から抜粋)

学習者	選択した伝記	「おすすめします○○さんの『レイチェル＝カーソン』」の記述
Ak	マーティー本	マーティーさんの『レイチェル＝カーソン』は、レイチェルのことだけではなく、レイチェルの母マリアのことや、DDTのことを細かくかいていて、レイチェルのことを支えていたのは、母ということが書いてあり、レイチェルは、お母さんを大切にしていたということが分かります。 マーティーさんが書いた伝記は、むずかしい言葉を使っていますが細かくかいてあるのでよく分かります。ぜひ、読んでみてください。
Yu	小手鞠本	小手鞠さんの『レイチェル＝カーソン』は、レイチェルが「沈黙の春」をだして、アメリカにどのようなえいきょうをあたえたことを(ママ)くわしく、読みやすくかかれていたりレイチェルのその時の気持ちもよく分かる伝記です。また、読む人が、楽しめる工夫もしてあり、レイチェルのことがとてもよく知れます。 小手鞠さんが書いた『レイチェル＝カーソン』を読めば、レイチェルがどのような苦勞をうけた人物なのかよく分かりますよ。

上げた。Yuは、小手鞠本の『沈黙の春』がアメリカに与えた影響が詳細に記述されているという内容面と、「楽しめる工夫」が読み手を惹きつけるという形式面の特徴を捉えている。このような筆者の言葉の特徴から、「レイチェルがどのような苦勞を受けた人物なのかよく分かる」と小手鞠本を評価する様相が認められた。

② 考察

「筆者の言葉」を批評する学習として、同一の被伝者の複数の伝記を読み比べた。まず、学習者は、テキストを相対化することによって伝記の特徴を捉えたり、筆者を認識したりすることができた。そして、筆者の言葉であるテキストの特徴を形式面、内容面から検討することによって、筆者がどのような被伝者を描き出したのかという筆者の意図を推論することができた。書評の学習活動では、テキストを内容面、形式面から検討したことを根拠に、自身の評価を表すことができた。また、テキストに対する学習者の判断や表現は異なるものになっており、学習者の主体的な伝記の読みが形成されたと言える。課題点として、複数資料を用いたことにより言語活動が複雑化した点が挙げられる。学習材の精選や、言語活動の目的や方法の理解を図ることが、さらに深い分析や検討を可能にしたと考える。

(3) 読者の生き方を創造する学習の分析(第1時, 10時, 11時)

① 学習の様相

単元の導入において学習者が自身の生活場面を振り返ったものを生かし、単元終末に被伝者の生き方と自身の生活場面を関係付け、「自分の生き方」として「レイチェル先生が教えてくれたこと」を書いた。次に、2名の学習者の記述を取り上げ、「伝記の言葉」と「自分の生き方」との相互作用から考えが創造されたかを分析する(表8)。

Siは、単元導入では見られなかった「友達との関わりと自分の在り方」について考えを表明している。これは、比べ読みや疑問解決の過程をとったことにより、「スーパーマン譚」の読みに陥らず、不安や葛藤など「弱さ」を含めた被

表8 生活場面の振り返りの記述の比較(抜粋)

学習者	第1時「生活場面で直したいこと、悩んでいること、がんばっていること」	第10時「レイチェル先生が教えてくれたこと」
Si	・帰ったら宿題をしないことに困っている。など	私は人に言われたことに少し反対しても友達がいなくなるのが怖くてすぐにながしていました。でも何を言われても怖がらずげないレイチェルの本を読んで勇気をもらいました。あきらめない勇気、信じ続ける勇気をレイチェルからももらいました。これからは自分の意見をしっかり持ち、何ごともながさずに友達と過ごしていきたいと思いました。
Yu	・やりたい夢が何なのかかわからない。など	私は、やりたい仕事や夢が何なのか、何をしたいのかわからなくて、悩んでいました。でも、レイチェルの伝記を読んで、レイチェルも夢、将来のことで悩んでいたんだなと思いました。今後まだ人生はあるので将来のことを少しずつゆっくり考えてみようと思いました。

伝者の理解が図られ、学習者に「共鳴の情」を抱かせた事例と捉えられる。一方、Yuは単元の導入において「夢がわからない」という悩みをもっていた。Yuは、レイチェルが人生選択の場面で葛藤があったこと、『沈黙の春』発表の場面で多くの批判を受けたこと、そしてそれを乗り越えたことを自分自身と重ね、「将来のことを少しずつゆっくり考えてみよう」と表明している。夢を叶えることだけが「生き方」ではなく、時に悩み葛藤するものであることを被伝者と筆者は伝えている。Yuの考えはそれを受け止めた「生き方」の表明であると言える。

最後に、学習者間で考えを交流した。Yuはその振り返りの中で「みんなの悩みを聞いてみて、みんなにも悩んでいること、うまくできないことがあるんだなと思った。レイチェルがみんなに与えた影響は大きいんだと思った」と記している。伝記というテキストが読者を「動かす」機能をもつことを新たに認識する様相も認められた。

② 考察

伝記の言葉を受け止め、読者の考えを創造する学習の分析を通して、学習者の「生き方」である新たな考えの創造が認められた。それは、伝記の比べ読みや疑問解決の過程を経て、被伝者への関心が高まったことや、被伝者の多面的な理解が促されたことが要因として考えられる。

7 まとめ

国語科における伝記学習の在り方を明らかにするために、3層の言葉を「理解」、「批評」、「創造」の学習過程と重ね合わせ、言葉を検討する学習について分析、考察した。本研究において明らかになった点は以下の通りである。

- ① 「被伝者の言葉」を理解するために、問題解決的に伝記を読み進めたり、被伝者が生きた時代と現代の様子を比較したりした。これによって、被伝者の言動や業績、当時の社会状況や価値観を捉えることができ、被伝者が生きた時代の言葉の理解が図られた。
- ② 「筆者の言葉」を批評するために、異なる筆者が書いた同一の被伝者の伝記を複数読み比べ、形式や内容に相違があること、それは描き伝えたい被伝者像が異なるためであることに気付いた。また、伝記の形式や内容の相違を根拠に筆者の意図を推論したり、書評という形で自身の読みや判断を主体的に表現したりすることができた。
- ③ 「読者の生き方」を創造するために、単元の導入で学習者が生活場面を振り返り、読みの目的を明確にした。そして、単元終末には学習者が多様な「生き方」を表明することができた。それは、複数伝記の読み比べや問題解決の過程をとったことにより、被伝者の「弱さ」も含めた「生き方」を多面的に捉えることができたためと考える。

今後は、他の被伝者の伝記を教材とし、考察に挙げた課題点の解決を図る実践、研究を進めていく。そして、国語科における伝記学習の在り方をさらに追究していきたい。

【引用・参考文献】

- Jezer, M. *Rachel Carson*, Chelsea: House Publishers, 1988. 山口和代訳『生き方の研究 運命の海に出会ってレイチェル・カーソン』ほるぷ出版, 1994年
- 上岡克己「べつこの道を歩む－レイチェル・カーソンの生涯」『国際社会文化研究』No.14, 高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科, 2013年, pp.1-17
- 興水実『新国語科教育基本用語辞典』明治図書, 1981年
- 小手鞠るい『こんな生き方がしたい 科学者レイチェル・カーソン』理論社, 1997年
- Maurois, A. *Aspects de la Biographie*, Paris: Bernard Grasset, 1930. 稲村善二訳『伝記の諸相』国立群馬工業高等専門学校, 2000年
- 小川高広「一人一人の読みの創出を促す伝記学習の研究」『教育実践研究』26集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2016年, pp.1-6
- 茅野政徳「戦後小学校国語検定教科書における伝記教材の変遷」『123回全国大学国語教育学会発表要旨集』全国大学国語教育学会, 2012年, pp.287-290